

く我が身を保つべし。是人生第一の大事也、人身は至て貴く重くして、天下四海にもかへがたき物にあらずや」とある。當世に處して有用の材となるには、人格の完成と身體の保健とに努めなければならぬ、その二つの者を訓練するのが則ち修養だ。

九二

人間は半ば獸類にして半ば神佛。

人間は半ば獸類で半ば神佛だといふ説は解釋の仕方によつては眞理である。何人といへども眞個神の如しといふべき人

神

と

獸

は無い。釋迦も基督も孔子も、後世吾人の前には修飾して紹介されてゐるので、眞物はあれ程ではないのであらう。結局良弟子や篤信家を有してをつたのが、その人の徳を加へたので、多少の缺點や誤謬は、識見その師を凌ぐ弟子共が、後から修正してしまつたのである。

如何なる人物にもせよ、獸的の半面を削り取つて神的の半面を輝かす様に人工を加へたから、美名を後世に傳ふことができるのだ。古聖賢だとして我々だとして、人間としては別に大した差異はない。

人類は眞箇神と獸との間の兒である。吾人には靈性のみでは無い肉性がある。その肉性や決して排斥すべきでなく、寧ろ尊重すべきである。日常身を保つこと獸の如く強勁であらねば

ならず、同時に心を持つ事、神の如く崇高なるべし、これは吾人天然の本體なるが、人は往々にして神に近づき過ぎ若しくはあまりに獸的ならんとするは俱に不可なり、身心衛生の秘訣は神性獸體なるにあり、自然の天法に循じて大自然に接觸するを忘れざる事、これを精神形體偕に健全なるを得る道である。

九三

新平は新平主義也。

新平は新平主義だ。

後藤男爵は能く『余は新平主義である』といふことを口にす。これは雷に洒落てはない。篇者はかくの如く解釋するのである。新は改新 (Reform) の新にして、平は和平 (Gentle) の平、事々物々新又新ならざれば衰亡する。事業にして然り、時間は社會をして刻一刻に舊きものを破壊し新らしきを建設する。心念にして然り、徳義は人間をして日一日に過失を改めて正善に赴かしむ。盤根錯節に向つて利刃を試みんとするの意氣勢力は、新の一事に發するのである。併しながら其古きを新たならしめんとする方法は和平でなければならぬ、溫和でなければならぬ。

政治につきて見よ、クロムウエルはクロムウエルの時代には適當だつた、ワシントンはワシントンの時世には必要だ

つたが、今日に於てはクロムウエルの精悍の氣とワシントンの薄進ならざる度量とが併せ存さなければ治國平天下の道を完うする事はできぬ。

如何なる時處に在ても、革新改新は發達の精神であつて、公平靜平は其方法である、維新と平和の二者は向上發展の雙翼兩輪ともいふべきだ。

こゝに平和々々といふが、謂ふ所の平和は屈辱的平和ではない、洪曷利の愛國者ユースト、埃太利の壓制に逆つて洪曷利一揆を起した彼のユーストの言つた事がある。「我は平和の人也、神は我が如何に平和を愛するかを知らしめさん、さりながら我が平和は革新の手段なり、平和を好むが故に屈辱を甘受するが如き臆病者の平和にあらず。」男爵の訓

語と何處か知らず合調子（ハモニエ、ストレン）を持つてゐる。 （編者）

九四

死滅の理解力を有するは、人間が萬物の靈長たる所以也。

大日本製糖會社の滅亡を保たんと、贈賄、社金費消、帳簿附込等の不正を犯せしこと社會に暴露し、明治四十二年の比、公廷裁判に上りしは、當時日糖事件として有名なものであつた。然るに會社の全責任を一身に荷ひて、社長酒匂常明が自殺を敢てした。世間一部の人は、漫に死を以て

自己の職責を解除しやうとするは、卑怯の振舞だと諍つた。當時後藤男爵の談話は、それ等の誹議を辯護して餘蘊が無かつた。(篇者識)

嗚呼今日は酒匂の葬式に行つて泣いて來た。實に氣の毒の次第で同情に堪へぬ。或る冷酷なる者が同人の自殺を評して、精神の異狀を起したのであらうと言つたさうだが、それは解しからぬ嘸語だ。凭んな事をいはれては酒匂も定めし泉下で瞑目出來まい。

成程耶蘇教信者のいふ所に依ると、人間が天壽を全うせずして自殺なぞするのは、即ち精神に異狀を生じた結果である。と理屈をつけてゐるが、凡そ人間が萬物の靈長として尊重さる

る所以は、死滅を理解して死すべき時に死すといふ斷行心を有するからである。牛馬でも犬猫でも鳥でも蟲でも、愛もあれば情も知つてゐる、人間の爲し能はざる機能を有してゐる動物も少くないが、死滅の理解力を有する生物は人間より外には無い。此所が所謂萬物の靈長たるところだ。而も武士道に基くところの行爲だ。斯の如き意氣は眞に日本の精華だと想ふ。言ふまでも無く、武士道は軍人の專有物ではない、農工商界にも共通する。

過日酒匂が余輩の所へ遣つて來て、日糖會社破綻の狀態を訴へ是非とも援助してくれ、整理の方法を授けてくれと、涙を垂れて頼んだことがあつたが、そんな事に關係すべき場合でもなし、又さうする理由もなかつたから斷つた。今思へば實に氣

の毒で、その時の困憊の状が眼前に見ゆるやうだ。

九五

末世とは何ぞや、幸福なるかな末世に生まるる人や。

人間は原始時代よりも今日に生まれた方が幸福だ。過去の人よりも現在の人が幸福だ。人間社會は時々刻々に進歩する、道徳上に於ても智識上に於ても物質上に於ても、一世紀以前の人よりも一世紀以後の人が優勝である。而も發達の餘地は綽綽として残存する。吾人は進歩と進歩との中間に立つてゐる。

今後いかばかり進歩するかは測り知り難い。進歩せる今日にあるものは、進歩せざる昨日の民よりも幸福でない譯が無い。人はよく『世紀末』^{フアン、バシエケ}だとか世は澆季に赴いたとかいふ、斯くして厭世家は現在を咒ふが、それは曲り屈つた理窟に過ぎぬ。現世を厭惡し末世々々と不謹慎に呷くのは、要するに生存競争の劣敗者か、然らざれば生存競争に劣敗すべき人々の愚癡であらう。

現世を尊び現世を終極とするのが、我國の固有思想である、一見淺薄のやうではあるが、至高至大、哲理の根本はそこにある。天國といふも淨土といふも一種の空想だ、現在のこの世が最善最美のものにして、これが悪るければ涙の谿とか穢土とか言つて避退したり咒咀する以前に、それを改造し、創建しなけ

ればならぬ。吾人の目前に涙の谿ならざる現在、穢土ならざる現在を活現しなければならぬ。それをさうせず、さう爲し得ずして現在を厭悪するのは狂妄に近いといはざるを得ぬ。

吾人は末世に生まれたのを天に謝し父母に謝さねばならぬ。我等は埃及の古墳中なる死者を裹みたる羊皮紙上の文字を読み得ると共に、世界の共通語を案出しやうとまで爲してゐる。我等はバビロンの榮華をも想像し得る、桃山元祿などの黄金時代をも知り得る。舊世界の人は舊世界を知るに止まりしが、新世界の人は舊世界と新世界とを併せて知り能ふ。男爵の言はれし如くこれが幸福でなくて何をか幸福といふべきや。

法律や道徳は綿密となつて、我等の生命財産は安全となる。交通の道は開けて千里を一日にして往來し得る。醫術は發達して如何なる疾病も根治され得る。我等の家屋は恐らく三千年以前の王公貴紳の宮殿よりも利便なものであらう。今日の婦人は教育に於て容貌に於て叔徳に於て、衣通姫小野小町よりも優美になつてゐるに違ひない。我等の智識は發達して何事をも知り得るに至つた。我等は未だ世界を造り得ずと雖も、世界の總てのものを自由に使役し得るに至つたてはないか。雷をも電をも風をも雨をも自由に指揮命令するに至つた。

殊に最も愉快なのは、益々生存競争が烈しくなつた一事だ。生存競争に於ても有能者が無能力者に勝つといふこと

を定められたのは壯快である。我等は奮闘し活躍して、何事にも何物にも勝ち得るを誇るに至つたのは末世に生まれ
たおかげである、これが幸福でなくて何をか幸福といふべ
きや。(篇者)

九六

世の中はあけて見ぬこそゆかしけれ、浦島が
子の手筈ならねど。
海媛の手匣てびのみかは世のなかをひらきて見
たき人ごゝろかな。

蓋とりて世のなかを見よ玉くしげ空しき底
に物はあるらむ。

最初の二首は四十三年六月の頃、後藤男爵が鐵道院總裁と
して、中央西線鐵道線路視察のため信州木曾路に入り、西筑
摩郡駒根村なる寐覺の臨川寺に休憩したる時、同寺に藏す
る浦島太郎の釣竿と玉手箱とを觀覽して即詠せしもの、第
三首は歸京後に詠出せしものとして傳へられてゐる。三首
は相聯びて人生上の疑問に對し一種の解答を與へたもの
で、深大の意義を藏す。

第一首は醉生、第二首は懷疑、第三首は徹悟の事とも見える
し、今少し詳しく言へば、最初のは現實の満足、中のは眞理の

管 手 玉

想求、最後は人生の創造を喝破したものと取れる。以下これにつき言ふところあるべし。元來魚や鳥や獸は現世に生存しながら、別に宇宙觀といふものを有たぬ、尋常人もまた有耶無耶の凡俗生活に安んじてゐる。彼等はいふ、宇宙の不可思議や神祕を闡明したところてそれがどうなる、そんな事を思索せば人生の矛盾や衝突多きを知るのが結局だ、かくては知識欲や窮理は有害であるとも有益ではない、寧ろそれよりは臭い物に蓋をして置けばよい、有るものは有る儘にして置けばよい。斯う思ふのが、第一首の現實に満足する醉生の境である。併しそれは凡俗の心で、一步進むと、自分は何故に現世に生まれたのか、何の爲めに生きてゐるのかといふやうな疑惑が百出する。單なる當面現在の事實のみ

管 手 玉

に満足せず、深く内部の真相、人生の運命を探究して、幽冥玄妙の深奥を掘拓し、摩訶不思議の懷疑を解明しやうといふ氣が出る、これが第二首にある眞理の想求だ。さてかくの如くして一たび玉匣の蓋を開くと、豈惻らんやその裡は虚無空寂、それのみか倏忽として持主が白髮の老人となるに至つた、白髮の老人となるとは絶望不幸を表象したので、少なくも一種の悲痛を感じるをいつたのだ。あけて悔しき玉手管、總じて事物の眞髓を知ると恐怖悲哀の情が起るものだ。例へば暗室にゐては空中の微塵はわからぬ、牕の戸を開きて光線を一筋通すと、その明光のうちに縦横に飛動する無量の塵埃が見え、今までは何とも思はなかつたが急に呼吸をするのもいやになる、それと同じこととて、空々寂々でゐて

は人生の正體はわからぬ。一たび徹悟の光明に照らすと、悲哀や痛苦の種が眼前に看出せて生き苦しくなる。則ち現世は夢幻泡沫であるとか没趣味であるとか、若くは不解決であるとかいふことを知るやうになる。とはいへ、玉手管の蓋を取りて、人生の空虚なるを曉り絶望するのは一知半解であり、輕卒である不徹底不覺悟である。無の中に「有」を認めるのが達人の達觀なので、煩惱即菩提、醜即美、苦即樂と悟得するこそ人生至極の境地、これが第三首の『空しき底に物はあ
るらむ』の意味であらう。

それを詳言せば、人生が無目的だとか無意義だとかいふのは、自分を差措いて、自分とはかけ離れた他のものに意義や目的を求めやうとするから起る誤謬で、人生の眞意義は他

に求むべきではない、自ら發奮努力して創造しなければならぬ。自分のこゝに生存するといふのが人生の意義である。現在に缺陷ありと認めたら自分で充實しなければならず、不完全なりとせば自ら完全にすべきである。自ら造らずして他に求めんとせば、終生何の得るところもなからう、空虚の底に物を見得るとせよ、その時俄然我が立ちつゝある周圍の面目は一新する、そこに新生活正眞理は發見さるゝからである。(篇者)

九七

最も神聖なる法律は我が心中にあり、心中の

自然性則ちそれ也。

能く法をつくるものは法を破る。法をつくるも心なり、法を破るもまた心。

爾の中にある自我を擴張せよ。爾の中にある自我を發展せしめよ。

最も神聖なる法律は我が心中にあり、それは何ぞや、人々は尊重すべき自然性を有つてゐる、内長性 (Endogenous) あることである。教育はその内長性を開發するに外ならず、この内長的自然性の本源なる自我は神性である。我萬物の中にあり、萬物我の中に存す、森羅せる萬象はこの自我の琴線に觸れて鳴らざるは無い、自我は宇宙の一部、宇宙は自我の全體である。心とは

自 然 性

自我のまたの名だとも言へる。

九八

自我と肉我、靈我と獸我、これを混想するものは謬まれり、自我を發揮せよ。

自 我

佛教の事は余輩能くは知らぬが、『佛法は無我にて候』と蓮如上人が言ひ遺されたとかいふので、自我を滅却せよといふ僧侶ありとせば、それは謬りではなからうか。無我とは我無しといふ事だとする、我を無くす事だとする、さうすると頗ぶるわからぬ。人間の道を進めるのに、我無しと前定するのはをかしい。

我を絶滅せよと教ふるのが宗教の極意だとすればそれは無理だ、アナクロニズムだ。

「我」あつてこそ宗教の必要もある。「我」あつてこそ絶対無限靈妙不測なる萬物本源の力をも知り得らるゝ、我あつてこそ天をも信じ、道をも明らめ、神をも知り、如來にも近づき得らるゝのである。「我」が實在するといふことは、人間智識の初歩である。「我」を無くすことはできない、又無くなるものでもない、それがなくなるのは人間の滅亡だ。

余輩は想ふ、佛教に無我といふその「我」は、自我のことではなくて肉我をいつたのではないか、則ち我慾我慢の「我」ではあるまいか。靈我の「我」で無く獸我の「我」ではなからうか、自我と肉我、靈我と獸我とを混同してはならぬ。人間の苦惱は名利心我慾心

から生ずる、かゝる獸我を去つて廓然として無限絶対の靈我を自覺するのが宗教ではないか。大他力の信仰を以て我慾を殺すのが宗教だらう。我慾を殺すばかりの宗教では満足できぬ、新時代の新人には自我を活かす新宗教が必要である。

九九

我の斯く存在するは則ち人生の意義也。

成功や金銭や、物慾の外に何の目的もなく、終生役々として息む暇もなく衣食住のために奔走し、衣食住のために心身を疲らし、多少の榮達に心を奪はれて乾燥無味なる生涯を送るのは人生の意義では無い。それを人生の意義と誤想する徒は少

しばかりの蹉跎撞着から、やれ憂き世だとかやれ人生不可解だとか現世を悲観するに至る徹底せざる解釋である。夢の世苦界など人生を輕蔑するのは、自分自身を輕蔑するに過ぎぬ。我斯くの如くこゝに存在すと自覺するは、何かそこに意義がなければならぬ。余輩は思惟する、我斯くの如くこゝに存在するのが即ち人生の意義であると。

科學者の一派は外面的に見て種(Species)の保存と發達を以て人生の意義となす、政治家の一派が後世子孫のために計るのを人生の意義とする、それもこれも間違つてはゐぬ。これを内面的に觀察すると自我の眞満足といふことに歸する。自我の眞満足は我斯くの如くこゝに存在する最後の理由だ。自我の眞満足を除きて人間の生存にどれだけの意味がある

か。余輩の謂ふ自我の眞満足は、主觀の中心に強烈なる深刻なる自我存在を價ひする充實を覺悟することである、利己的満足ではない。普通に解釋する成功だとか金錢だとかいふ單純な快樂や幸福が眞満足ではない。それは僞満足小安心である。客觀的満足である、吾人が今日生存の意義に迷ふといふのは、我は斯くの如くこゝに存在するといふ事を自覺して、さて最高の満足を何處に求むべきかに迷ふのである、然うした迷ひには誰しも行當らなくてはならぬ。

一〇〇

人生を造れ。人生を造るものは我也。

人生は必至的運命の機械ではない。人間は人生を改革し創建し得らるべきである。

現實を探搜して萬古不易の人生觀を摘出し、これを以て永久に人生の懷疑を拂拭せんとするのは古人の舊夢であつた。さうした一定不動の人生觀があるものと思ふと、實際生活に臨んで杆格齟齬が生ずる。空想的懷疑者が人生不可解なりと悲觀厭世の結果大事の一生を謬まる如きは、夢を現と見て愚なる誇張的獨斷を有つからである。絶對眞理が客觀的に存在するものと思ひ、自ら人生を改造せんとする勇氣なく、消極的態度のまゝでかゝる眞理の暴露し難きは當然といふべきだ、それを悲み若くは憤るのは、棚の牡丹餅に手を出さず自ら落ち來るを待つやうなもの。

かの徒輩はいか程永く待つてゐたからとて、人生の懷疑が解けるものではない、それといふのが、人生は當初から永久不變の實相を以て靜止する世界では無いからだ。一定した或る法則を備へた世界ではないからだ。古來人類が自由意志を以て經綸し來つた活世界が人生である。人生が將來如何に發展すべきかは、決して豫定した運命を有つてゐるからではなく、人類の努力如何によつて、進不進不幸が初めて定まるのである。人生の秘密は何處にありやと探索するのは盲動である。もし懷疑するならば、人生は如何にして造るべきかを疑ふがよい、然うだ、人生は如何にして造るべきか、これが切實なる懷疑である。新時代新人の懷疑である。吾人はその懷疑を解かんがた

めに努力しなければならぬ。その努力には失敗もあらう過誤もあらう、成功する所或は微少であるかも知れぬ。而もそれが人生の常態だとすれば、成功不成功は懸念の外に措くべきで、努力するだけは努力して、自己の人生を自己の力量ある程度に創造すればよい。人間はこゝに於て「活きたる人」と呼ばれるのである。

處 世 訓 終

處 世 訓 拾 遺

男爵 後 藤 新 平 述

如何にして赤十字社は歐洲に創設されたかといふに、其原因の一は無論基督教である。「敵を愛せよ」といふ博愛主義を推し究めてゆくと、斯うした事業をせねば宗旨に背くから之を爲さざるを得ずといふ段取に達するので、他の原因は戦争の實際上より來たのである。英國ナイチンゲール嬢が露國クリミア戦争に赴き、傷病兵看護をなしたのが彼の赤十字社の濫觴だともいふし、又瑞西人ヘンリー・ヂュナンが伊國ソルフェリ

ノ戦役を目撃し、その惨憺たる事態に心を痛むるあまり、救療事業の必要を主唱したのが嚆矢だとも言はれる。何に致せ、この事業は主動的に起つたのではなくて受動的に生じたのに相違無い。

然るに我が國では、この赤十字社事業の精神は數百年前に祖述されてあつた。島津義弘公が朝鮮役後敵味方の菩提供養のため紀州高野山に石碑を建立せし如きは、その適例で、猶ほここに面白い話の一つある。曲亭馬琴が既に赤十字社事業について書いてゐる事だ。

南總里見八犬傳卷の四十二、第七十回あたりに「神薬施し得て敵兵再生す」といふ條がある。

この日、大江親兵衛は博愛仁恕の心をもて、敵自家の差別なく、刀瘡兒及陣歿

の兵毎に、神授の仙丹を施して、もて死を起し、生に回さまく欲するに、則ち信乃現入等と商量して、真間井縦二郎秋季を施薬の頭人にして、代四郎紀二六喜勘太等の三名を以て其副とす、(中略)こゝをもて、憊る必死の輩毎も、共に亦再生の薬の驗あり、代四郎は腰に帯びたる神薬を一個一個に其舌に塗らし、て、且つ瘡口に薬を布くに、輕きは即時に甦生るもあり、重きは一時或は二時三時の程に呼吸出でて、皆我に復らぬはなし、その時秋季興保等は再生の敵兵を勦り慰めて、里見殿の軍令は箇様々々と、仁義の要領を説示すに、鬪戦は已む事を得ざる所行にて、其本意にあらず、こゝをもて、身家の士卒に令して、専當の敵を撃果すとも、首を捕るを功とせられず、既に勝負定まりて鬪戦果て、いも、首實驗を行はれず、仁慈はこのよしのみならず、非如敵の士卒なりとも、戦難義に及ぶ時、君の爲めに戦死しぬるは、則ち是れ忠臣也、誰か憐むべからざらん、その陣歿の毎は、大江親兵衛が神授の仙丹をもて、生して還しつかはすべしとある。(後略)

既にかくの如く赤十字社事業の精神は稗史の上に書かれた、即ち主動的に人間の天分について考へるところあつたので、人

道主義はこの小説家によりて夙くに我が國に唱道せられたものと言へる。依田百川などが詳密に八犬傳の評釋をなしたが、この一事に言ひ及ばなかつたのは不審に堪へぬ。

終始眞實なれ、人と交り或は讀書するに方つても、努めてその中より眞實を求めねばならぬ。豊臣秀吉は智謀を以て天下を風靡した。併し彼には大に眞實の點がある。近くは大事業を成就したクロイマリの如き、ルーゼベルトの如きに就ても、その眞實の點を看出してゆく事が、必要である。要するに幾多英雄の事業は眞實が主であつて、智謀は客だ。自己の衷心に誠あれば、眞實あるものと無きものとを辨別せらるゝが、自己の心に

誠なくして大英傑の事業を見ると、萬事權謀術數の様に思はれて、其主要的成分たる眞實を見る事ができぬ。それは自己その物が有する權謀術數といふ色眼鏡を透して窺ふからである。

遞信事業の歌

第一章

青雲の靄くきはみ

白雲の向伏すかぎり

大海原掉梶干さず

船艦は舳とつづき、

磐根木根踏みさくみては

早文の荷の緒をかため、

空と海さては陸を

結ひつなぐ我らがつとめ。

第二章

西東眺めはてなき

大空に高くひらめく、

くれなるの旗の標章は

遞信の務めの「テ」の字。

天職のそのかしら字を

旗に書きかざす九萬は、

信愛を互みにまもる

兄弟姉よいとよ。

第三章

皇神の御心のままに

隣り國いよよ親しく、

遠つ國は八十綱かけて

引寄せつ、相近づけつ。

時代場處限りを知らず

隈もなく至れる事業、

人々を富足はすと

いそしめや晝はひねもす。

第四章

天馳する平和のつかひ

夜もすがら我が働けば、

文明は四方にすすみて

百千花ひらく常春。

時代場處限りを知らず

隈もなく至れる事業、

その幸をいさやいはへよ、

いざ謳へその歡びを。

公人としても私人としても、世に處し事を爲すに、人は秘密を有せぬものは無い。秘密を有する事は果して善いか、悪いか、善いも悪いもない、人間には秘密なかるべからずと余輩はいふ。何人にも秘密はある、大なる人物には大なる秘密がある、小人物には小秘密がある、それでよい、その秘密は何人にも秘密たるべし、秘密の無い人間は單純な幼稚なあけ放ちのしまり無しで、障子襖のあらぬ座敷同様だ。さりながら余輩の謂ふ秘密には一の條件がついてゐる、何時にても開放せられ得る秘密でなければならぬといふ一事だ。開放すべき時來らば何人にも公示して慚ぢ懼るゝところのなき秘密であらねばならぬ。取外し得る戸障子であらねばならぬ、公明正大なる秘密、それ

てあらねばならぬ。

嘲罵、譏笑は如何なる効があるか、何もない、唯だ嘲罵されたる者を大きくし、譏笑されたる者を豪くするばかりだ。

眞珠を得やうとせば、自ら深淵にその軀を投ぜよ。

世の中には辭令書の裏面が讀めぬ官人が多い、骰子の反面が見えぬ博徒が多い。これ等の人々の間に立つて往くのだから、

自信力を確持する意志強固のものが目に立つ。

法律ばかりで世を治めやうとするものは、水を以て人を酔はせんとする徒だ。

トルストイもニイツェも不具者である。ジャンダアクもナイチンゲール嬢も不具者である。不具者の偉大なるものに過ぎぬ。

神は人に下り、人は神に上る。

拾

多数の人が有して居る徳、所謂徳望家人望家などは、いはゞ自然に生まれつゝいたる徳である。則ち人望家たり徳望家たる素質を先天的に具備してゐるのだ。若し織田信長のやうな才能材幹の人で、人望天下に普きものがあつたら、それこそ、稀世の人傑といはねばならぬ。

遺

法は人が造り、法は人が破る、掟はいかに立派にできてあつても、守るべからざるものは眞の法では無い。不成文でも守られ

拾

るものが法律だ。正月の儀式、盆の祭祀、婚姻の作法、あれが眞の法である。誰が造つたといふのが知らぬか、誰人も守らざるものあらず、これを實行しなければ法律第何條に依て斯様々々の處罰あるべし、故に已む無くそれを爲すといふのはいかぬ、何人と雖も自然にこれを守つて懈らぬ掟でなければならぬ。松かざり鱗（まき）に昆布（こんぶ）、法はそのうちに存する。

遺

故勝海舟伯は余に語つた。「お前は醫學をやつてゐるさうだが、人間の頸の働きを知つてゐるか」と。伯は「普通人間の頸の働きといふものは、左右に廻轉させるか、前後にうなづくか、それより他に動かす事はできぬ。今普通の人間が、頸を左右に廻轉

させたところで、僅かに後方を見る事が出来る位のものだが、乃公の頸は決してさうで無い、上下に伸縮自在である』といった。勝伯は勝伯だけに巧い事を知つてゐる。

神佛かみぶつみそなはすらむ、まめやかに

國へつくせる臣おみがころを。

目のあたり讚たふる人のあらずとも

つとめすさむな後のちの世のため。

その心正こゝろただしからずば雪のなかも

あづくやあらむ、きたなくやあらむ。

世の中に怖ろしい人がある、それは怖ろしいといふ事を知らぬ人だ。卑ひしい人がある、それは自らを卑しとする人だ。

猶太教のエホバ(Yehovah)も、回々教のアラー(Allah)も、波斯教のアフラ(Ahura)も、基督教の神も、佛教の佛陀も、みんな信仰者が自分に似せてつくつた自個の影だ。

自己の職務を行つて、完全に責任を盡くすといふのは、義理や體裁や理窟ぐらゐては到底出来ぬ。心底から逃ばしる「誠」が其人の身に備つてゐなければ不可ぬ。「誠」は人間活動の大原動力で、この「誠」が親子の間に顯るれば孝となり、君臣の間に現れると忠となり、國に關しては愛國としり、自己の職務に關してあらはれると忠實となる。

處世訓拾遺終

明治四十四年五月一日印刷
 明治四十四年五月十五日發行

正價金九十錢



述者 男爵後藤新平
 編者 平木照雄

發行者 今津隆治
東京市日本橋區下槇町十二番地

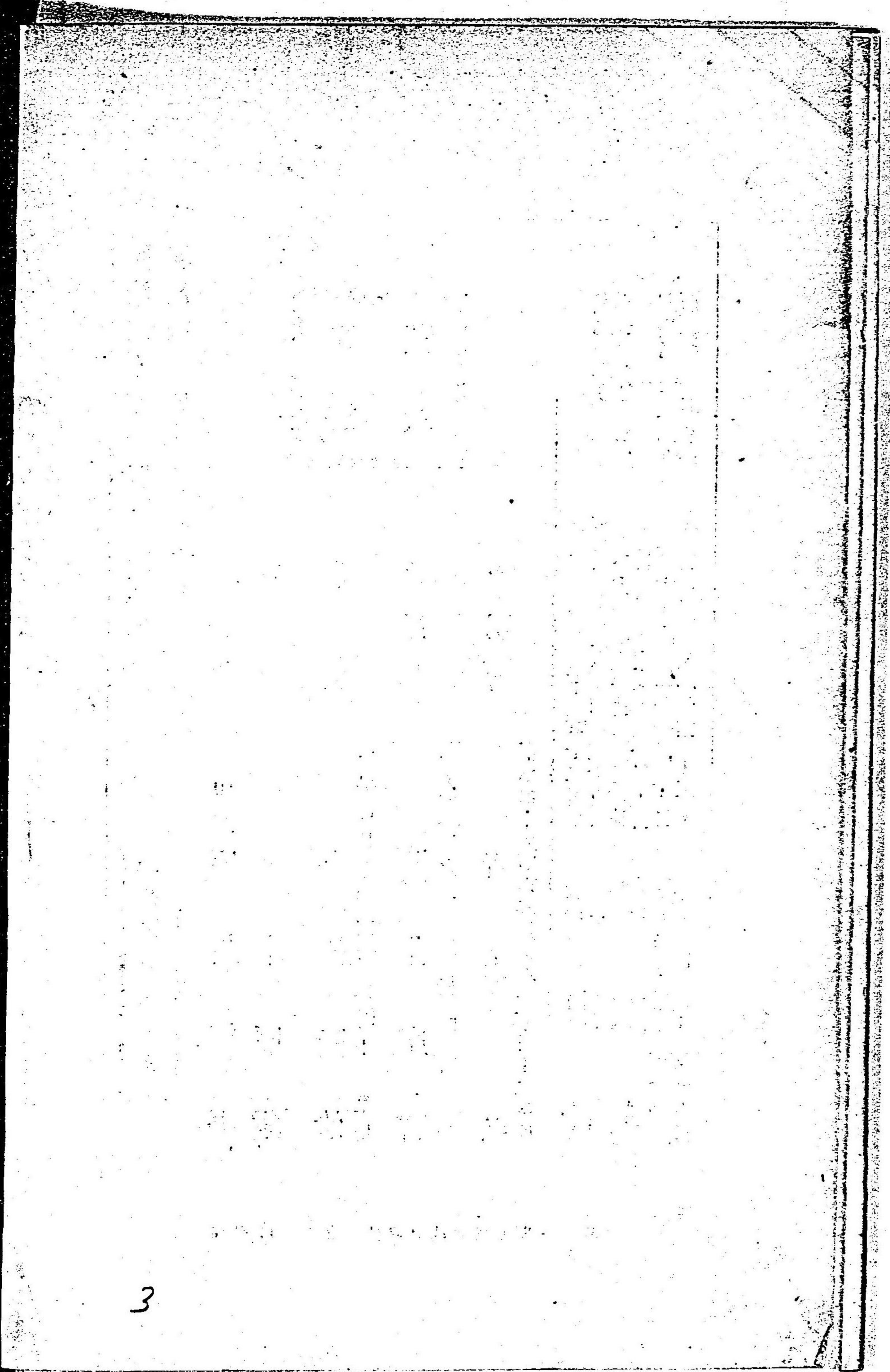
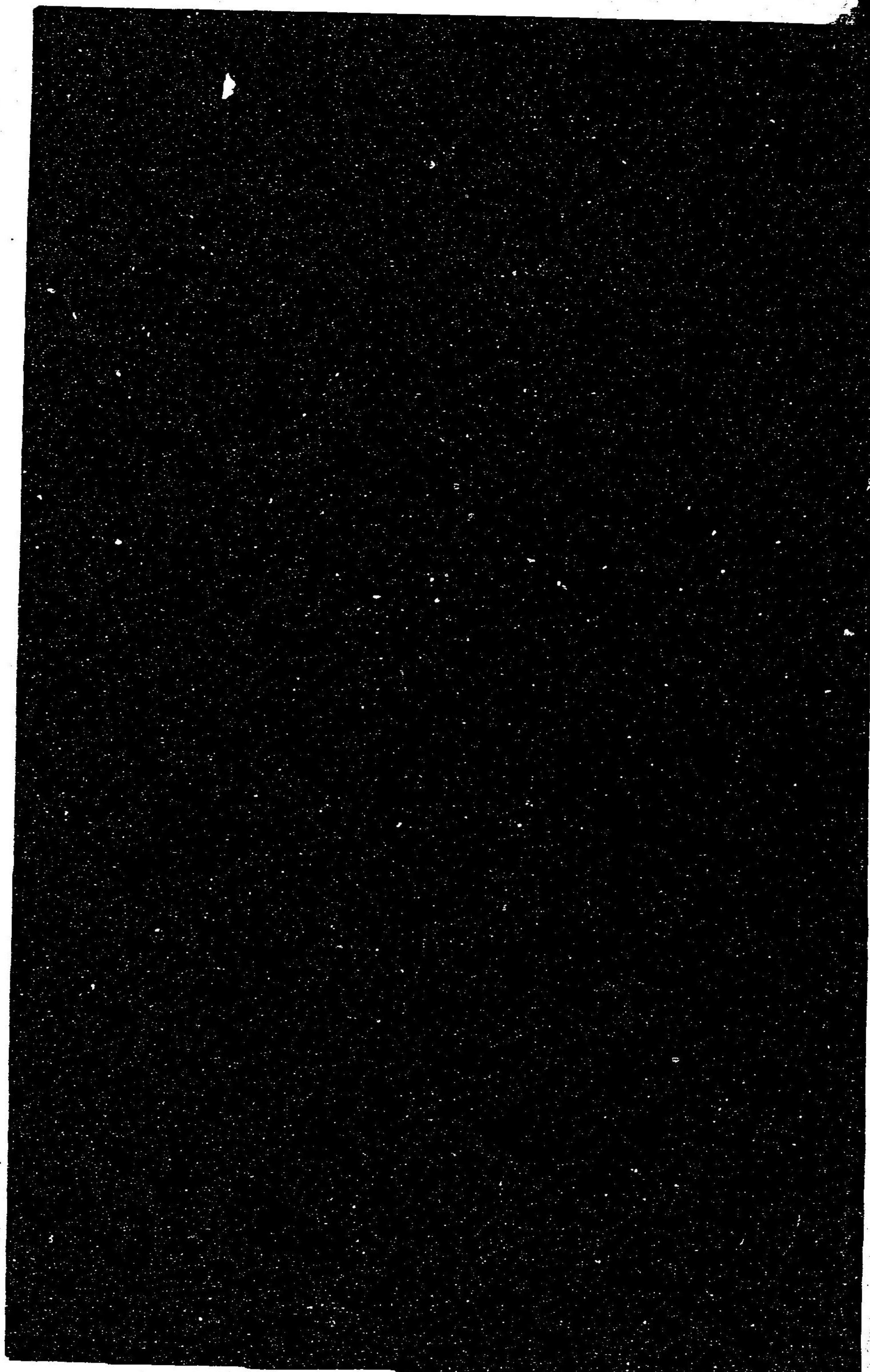
發行者 櫻井庄吉
東京市京橋區柳町五番地

印刷者 青木弘
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
 關西發賣所

東京市日本橋區下槇町十二番地
 振替口座東京六千四百三十五番
 東京市京橋區柳町三十五番地
 振替口座東京三番地
 大阪市東區備後町四十三番
 大坂市東區大坂四十三番
 振替口座大坂四十三番

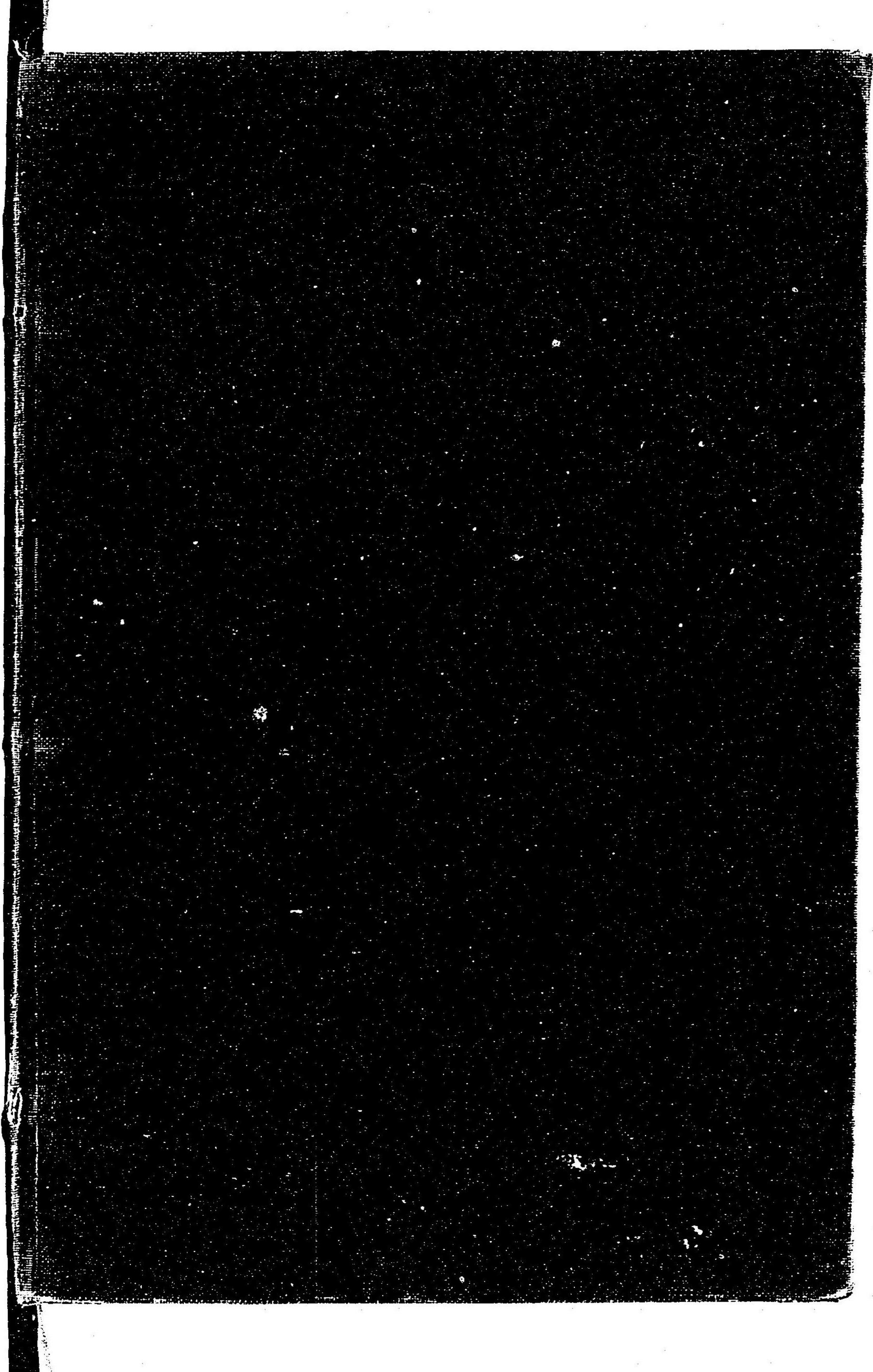
如文山堂
 郁文館
 吉岡寶文館



173

201





010451-000-3

335-201

処世訓

後藤 新平/述

M44

AAE-1895



